

渡りの季節

登米、栗原市の伊豆沼・内沼から渡り鳥が去っていく季節です。彼らがそわそわしているのを感じます。寒さが続いた後、南風が吹いて気温の上がる日があります。そういう日、鳥たちは渡ります。

飛び立った群れが渡りなのか、いつもの水田への移動なのか、注意深く見ていると分かります。渡りのときは帰っていく北へ向かってぐんぐん高度を上げていきます。普段の移動では見せない急上昇です。そしてすぐに編隊を組みます。帰るのだ、という強い意志を感じます。

伊豆沼で雪がなくても、行った先では多くの雪ということもあります。そういうときには、まだ早かったな、と戻ってくることもあります。雪に阻まれつつ、行きつ戻りつ、鳥たちはゆっくりと北上します。

鳥たちはどこへ帰るのでしょうか。衛星追跡の結果をみると、伊豆沼を出発したオオハクチョウは北海道道東やサハリンなどを經由して、伊豆沼のほぼ真北に位置するロシア・シベリア北東部のコリマ川やインディギルカ川の中下流域で繁殖します。マガンはオオハクチョウよりも東よりのコースをとり、宮島沼など石狩平野、カムチャツカ半島を經由して、ベーリング海沿岸で繁殖します。オナガガモはオオハクチョウ、マガンの両方の経路を使います。彼らの故郷まで3000～4000キロの旅です。

こうしたガンカモ類の衛星追跡が国内で最も多く行われているのが伊豆沼です。鳥たちの渡り経路内の重要な生息地を明らかにすることで、国際および国内の共同の中で生息地保全につなげていくことができます。

帰る鳥がいる一方で、けがや病気で残らざるを得ない鳥もいます。電線などにぶつかって骨が折れてしまうと、ほとんどの場合、飛べなくなります。鳥は飛ぶために体を軽量化していて、骨は空洞になっています。そのため、一度折れてしまうとくっつきにくいのです。夏の伊豆沼でハクチョウが見られるのもこのためです。

鳥たちがいなくなると、晴れ晴れとした安堵感を感じます。

嶋田哲郎

(河北新報・微風旋風 2015年3月5日掲載)